

# 明石君のへけはひ

——「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」をめぐって——

竹内正彦

## 一、光源氏との邂逅

月入れたる真木の戸口のなか、明石君は心を固く閉ざしていた。八月十二、三日の月がはなやかにさし出た夜、とうとう光源氏が訪れてきたのであった。確かにこれまで光源氏からの文が何度も寄せられていたし、明石君側からの来訪を求めていることも聞いていた。しかし、みずからの身のほどを思う明石君には光源氏との結婚などは思いも寄らぬことであり、その申し出に応じることは決してなかった。あやにくなことに、そうした明石君の態度がかえって光源氏の想いを募らせていった。光源氏は明石入道を促し、この夜、ついにその手引きによってここに忍んできたのであった。娘の居所を輝くばかりにしつらえ、真木の戸口をおし開けて源氏を招き入れる明石入道。入道は娘の明石君には何も知らせることなく、事を運んだ。もしもそれを知れば明石君は身を隠すだろう。入道にはそれが充分わかっていた。だが、明石君もいつかこうした夜の来ることを予感していなかったとはいえない。源氏に逢うことがあつてはならないとする固い決意がその予感を押し殺してきたのだとおぼしい。だから、間近の暗闇に源氏の声を聞いた時、明石君はついに訪れてしまつたいかんともしがたい状況を嘆き、せめて源氏にうちとけぬ心ざまを見せることによつてみずからの固い決意を示そうとするのであった。

こうしたうちとけぬ明石君の態度に光源氏は戸惑う。身分にそぐわ

ず人並みの様子ではないか、都の高貴な身分の女性でもこれほどまでに私を拒むものはいなかったのに、あるいはこのようにうらぶれてい

る私を見くびっているのか——。さまざまに思い悩む源氏。入道に導かれてのことであり、無理強いすることはできない。かといつて明石君との「心くらべ」に敗れることもできない。おのずから源氏のこと

ばは熱を帯び、明石君の心は次第に揺れ動いていくのであった。

近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさぐりけるほど見えてをかしければ、

「この聞きならしたる琴をさへや」などよろづにのたまふ。

むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと

明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。……

（「明石」二—二五七頁）

源氏のことばに徐々に心が惹かれていく明石君は、それをとどめるように奥に引き入ろうとする。その折、几帳の紐が箏の琴にふれて音を立てる。「琴の音は娘心の象徴であろう」とされるように、明石君ははからずも、ことばではなくその音によつてみずからの揺れる心を源氏に示してしまつたのである。源氏はその音に「けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさぐりける」明石君を思う。闇のなかにさきほど

までの明石君の「しどけな」き様子がありありと感じとられている。

それは源氏のたんなる妄想ではあるまい。玉上琢彌はこの時の明石君

の心情を評して「恥ずかしい事を見られてしまった思いである。一步、自分の中に踏みこまれた、と感ずるのである」とするが、この時偶然かき鳴らされた琴の音によって、源氏のことばに惹かれていく明石君の心がむしる彼女の身体の外側に顕現してしまっただけという。

光源氏はこの明石君の心の揺れを見逃さなかった。源氏は「この聞きならしたる琴をさへや」などと語り、すかさず「むつごとを語りあはせむ人もなうき世の夢もなかばさむや」と歌を詠みかける。「睦言」に「琴」を掛けながら、あなたと語り合えばこの憂き世のつらい夢が醒めるかもしれないと訴える。この歌に対して、明石君は「明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ」と答える。それは、源氏の歌をうけながら、「明けぬ夜」にまどつていて自分にはあなたの夢を覚ます力などはないと切り返すものであった。ふたりの出会いは宿命的なものであったとはいえ、今の明石君がそれを悟ることができるとは思えない。「明けぬ夜にやがてまどへる心」とは、暗闇のなかに揺れ動く彼女の心を示しているのであった。

ただ、この歌を聞いた光源氏はある奇妙な感覚におそわれる。「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり」。歌をうたった明石君の「けはひ」が、「伊勢の御息所」、すなわち今は伊勢に下向してしまつた六条御息所によく似ていると感じられたのである。もちろんこれは光源氏の主観的把握によるものであろう。彼は直感的にそのように思つたのであり、彼自身はそれほど気にとめる感覚ではなかったのかもしれない。しかしながら、光源氏と明石君とのはじめての邂逅の場面に刻み込まれたこの表現の意義は、やはり看過できないものとしてある。

この表現については、明石君の造型や物語の構造といった視点からさまざまな見解が提出されているが、なかでも注目すべきは坂本和子の次のような指摘であろう。

明石上は都を離れた明石浦に育ちながら、決して鄙びた様子ではなかった。逆に「いとあてにそびえ」た様をして、「心はづかしき」

けはいの女性であった。そしてその様子は伊勢にある御息所に非常によく似ていた。明石上と六条御息所が血縁関係にあったとは書かれていない。然しこの二人が似ているという設定の仕方には、何らかの意味が含まれているのであろう。(中略)或いは入道の父大臣と御息所の父大臣との間に、又中務宮も含めて血縁につながる関係を想定して、その中から、御息所と明石上とが源氏の妻の座を継承する関係を設定したのかもしれない。

明石君と六条御息所との血縁関係の想定。もちろん、それは物語に語られていることではない。しかし、御息所と明石君が同時に源氏の愛を受けることがないことや御息所の死霊が明石君や姫君に祟ることがないことなどをふまえて、坂本はふたりを同じ血筋をひくものとしたのであった。確かに「いとようおぼえたり」とされる限り、ふたりの何らかの関係性は一概に否定できないものとしてある。血縁とはしないものの、小沢恵右は「桐壺更衣―藤壺―紫上の類似が源氏の精神的な形成における支柱となっていたのに対し、六条御息所―明石上の類似は、源氏の政治的権力、勢力の確立・発展の支柱になっていた」と述べてその系譜に着目し、久富木原玲は、桐壺更衣、六条御息所、明石君、明石中宮といった関係性を「紫のゆかり」に対する「御息所のゆかり」としてとらえる。

しかしながら、一方でそうした血縁や系譜、あるいは「ゆかり」といった把握によって物語の構造をとらえようとする見解に否定的な見方もある。たとえば、鎌田清栄は、この場面の直前に『齋宮女御集』の「この音にみねの松かせかよふらしいつれのをよりしらへそめけん」(私家集大成・齋宮女御Ⅰ・一〇六)が引かれていることから、「直前の場面作りが女御の「琴の音に」の歌によっているため、女御と同じ伊勢の御息所と呼ばれる人の名を挙げたのではないかと私は考える。逆に言えば、明石女像を六条御息所に似せて作ろうとしているのではなく、場面設定にかかわりのある齋宮女御から六条御息所を思い出して、明石女の誉め言葉にしたのではないかと考えるのである」と

し、「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」との表現を、「斎宮女御」を媒体とした場面構築の方法という限定的な意義においてのみ考えるべきことを主張している。また、安藤徹は「明石君と御息所が同族であることの表象として読むことも、その可能性の一部ではある」としながらも「それが決定的な意味だとしてしまつてはテキスト表現を単純化してしまうことにならないだろうか」として、むしろさまざまな関係の重層性のなかでたぐりよせられてくる御息所と明石君のあり方を考えるべきとの見方を示している。

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり——。この物語表現をどのように読めばよいのであろうか。この表現がいかに物語に呼び込まれ、そしていかなる意義を生成していくのか。とくに明石君にまつわる「けはひ」に注目しながら、この作中人物の造型のあり方を考えてみたい。

## 二、〈けはひ〉の類似

六条御息所に似ているという明石君の〈けはひ〉。そもそも〈けはひ〉とは何なのであろうか。根来司は、「けしき」と対照させながら、「けしき」は漢語の「気色」から出た語で多く視覚的意味で用いられるのに対し、「けはひ」は和語で「気延」の義であり、聴覚的雰囲氣的意味で用いられ、「けしき」が視覚で直接的にとらえられる様子、徴候をいうのに対し、〈けはひ〉は聴覚などによつて間接的にかがえる様子、雰囲気をいう」とする。〈けはひ〉は見ることはできない。ただ感じとることができただけだ。原則としてということならば、そのようにとらえてよからう。聴覚とはその〈けはひ〉を感じとる感覚のひとつにすぎないのだから。こうした〈けはひ〉について、梶井恵子は、「〈けはひ〉の初出は『かげろふ日記』（二例）で『枕草子』（三例）以降『今昔物語』に至る中古文学において用例が見られるが、『源氏物語』三七四例、『紫式部日記』十九例と紫式部の作品に用例が多く、紫式部がそ

れまで「けしき」で表現されていたものを、意味的、修辭的により微妙に区別しようとしたことがうかがわれる」と指摘している。確かに、『源氏物語』においては、夕顔と玉鬘（胡蝶）三一―七五頁・一八五頁・一八八頁）、光源氏と冷泉帝（真木柱）三―三八五頁）、柏木と薫（椎本）五―二〇〇頁）、大君と中の君（早蕨）五―三五六頁・「宿木」五―四四五頁）、大君と浮舟（宿木）五―四五〇頁）、中の君と浮舟（宿木）五―四九三頁・「浮舟」六―一二二頁）などの人物相互の〈けはひ〉が似通つていることが表現されており、「作中人物の〈けはひ〉は血縁関係にまつわる物語の真相と「ゆかり」や「形代」の問題をはらむ」ともされる。『源氏物語』における〈けはひ〉は、たんに雰囲気を示す語にはとどまらず、物語の主題や方法などと深くかかわる鍵語のひとつであるといえよう。

たとえば、「葵」巻における次の場面。

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつまとのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。

（葵）二―三九―四〇頁）

葵上の病床に近づいた光源氏は葵上に取り憑いた六条御息所の生霊と対峙することとなる。この時、歌をよみかける葵上の〈けはひ〉は、葵上のものではなく六条御息所のそれになつていたと語られる。光源氏の目の前にいるのは、葵上に相違ない。しかし、光源氏に語りかけるその〈けはひ〉はまぎれようもなく六条御息所のものであった。葵上の身体が六条御息所の生霊に領有された時、その〈けはひ〉が変つていたのである。

玉鬘の〈けはひ〉が「似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、い

とよくおぼえて、これは才めいたるところぞ添ひたる」(「胡蝶」三一—七五頁)と表現されるように、外見的に「似る」ことがなくとも「へはひ」の類似が認められる場合もあり、『源氏物語』の人物たちにかかわる「へはひ」は、その人の外見ではなく、もつと人の内部の奥底にあるものと響き合っているようだ。人の「へはひ」とは、暗闇、御簾や几帳などの隔て、さらにはその人物の身体といった視覚的に隔絶されたむこう側から延びてくる何か、いかなれば魂の面影ともいうべきものであるといえようか。葵上の「へはひ」が六条御息所のそれに変わったのは葵上からだが御息所の魂に占められたためであり、「へはひ」が血縁や「ゆかり」「形代」などの系譜とかかわるのはそれらの人びとの魂が類似しているからであらう。<sup>12</sup>

「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」とされる明石君の「へはひ」。明石君に六条御息所が憑霊しているとはとらえられないとしても、このふたりは血縁であるといえるのだろうか。土方洋一は、藤壺をはじめて見た折の桐壺帝の「げに御容貌ありさまあやしきまでぞおぼえたまへる」(「桐壺」一一四二—四三頁)という表現をめぐって次のように述べている。

「似る」が客観的な特徴をとらえての判断であるのに対して、「おぼゆ」は主観的に傾く。「似る」と「おぼゆ」とは、『源氏物語』の中では注意深く使い分けられており、使い分けられるところに主観的な意図が潜在すると考えられる。この条も、帝が藤壺宮に対面した時、宮の全体的な雰囲気の不思議なほど亡き更衣のことを帝にまざまざと思ひ浮かべさせた、といっているのであって、客観的な特徴をとらえて似ているといっている訳ではあるまい。<sup>13</sup>

「似る」と「おぼゆ」とは「主観的な意図」を潜在させながら分別されている。確かに、先にあげた玉鬘の「へはひ」も「似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いとよくおぼえて」とあった。そもそも「へはひ」そのものが、間接的に感じとられるものであってみれば、それを「おぼゆ」とするのは不自然なことではない。藤壺と桐壺更衣に血

縁関係がないように、「へはひ」の類似を感じ取られるものたち同士に血縁関係は必ずしも前提とはならないのだろう。とくに「いとようおぼえたり」とされる明石君の場合、六条御息所と血縁である可能性は一概に否定できないこととはいえ、それはどこまでも可能性にとどまるものである。光源氏が感じとった明石君の「へはひ」は、あくまでも光源氏の主観によるものであり、それは血縁という客観的な事実を保証するものではない。<sup>14</sup>むしろ、本来血縁的な関係がないはずのふたりの「へはひ」が、光源氏には似ているように感じられたというところにこの表現の特性があるのだろう。光源氏にそのように感じさせた明石君の「へはひ」とはいったいどのようなものであろうか。

### 三、光源氏のなかの明石君

当初、光源氏の明石君に対する意識はけつして高いものではなかった。明石入道から娘に掛ける期待を語られた時も、光源氏は次のように答えている。

「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはずれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。なかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかのことなくて月日を経るに、心もみなくづほれにけり。かかる人ものしたまふとはほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ棄てたまふらめと思ひ屈しつるを、さらば導きたまふべきにこそあなれ。心細き独り寝の慰めにも」などのたまふを、限りなくうれしと思へり。(「明石」二—二四六—二四七頁)

自分が「思ひかけぬ世界に漂ふ」のは、入道が語ったように「浅からぬ前の世の契り」であるようだ。明石君のことは小耳には挟んでいたものの、「いたづら人」である私を「ゆゆしきもの」として避けている

と思つていた。それでは、私を明石君のもとに導いてくれるのか、「心細き独り寝の慰めにも」しよう——。この光源氏のことばは、光源氏が明石君に興味を持ち、逢うことを強く望んでいるように聞こえるし、入道も源氏のことばをそのように受け取つて「うれし」と思つてゐる。ただし、この時の光源氏にとつて、明石君はあくまでも「心細き独り寝の慰め」の対象なのであり、所詮は受領の娘に過ぎないのであつた。こうした明石君への意識は、その文通を通して徐々に変化していくこととなる。入道と語つた翌日、源氏は「ものの隈にぞ思ひの外なることも籠るべかめる」と心づかいして「高麗の胡桃色の紙」に「えならずひきつくるひて」文を送るが、「わが身のほど」を思う明石君は答えず、入道の代筆による返事のみがもたらされる。源氏はさらにその翌日、再び文を送るのであつた。

いぶせくも心にものをなやむかなやよいかにと問ふ人もなみ

(同・二四九頁)

気持ちも晴れることなく思い悩んでいます、「やよいかに」と尋ねてくれる人もいないので——。前日の手紙とは異なり、この日のそれは「いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに」書かれたものであつた。「若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ」と語られるように、この手紙は、女性としての明石君にあてられたものであり、明石君も「めでたし」と嘆息しないではいられない。しかし、そうした光源氏の美質は明石君を魅了すると同時に、彼女をしてみずから「身のほど」を強く意識させるものであつた。

浅からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

手のさま書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう

上衆めきたり。

(同・二五〇頁)

「濃く薄く」書き紛らわされた筆跡は、明石君自身の揺れる心の表象である。だが、明石君は動揺しながらも、源氏の歌のなかの「やよやいかに」を用いて、あなたの「思ふらん心のほど」こそ「やよやいかに

に」——いったいどのようなものでしょうかと切り返す。こうした明石君の「手のさま書きたるさまなど」は、「やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり」と源氏を感じさせるのに充分なものであつた。源氏のなかで、明石君は徐々に都の女性たちに劣らぬ存在となつていく。ただ、現実の身分差は歴然としてゐる。源氏は、人目を忍んで二三日と隔てを置いて文を通わしながら、「人進み参らばさる方にても紛らはしてん」と明石君の方からこちらに進んでくれることを内心願うのであるが、これは明石君を〈召人〉としての処遇しようとする思惑によるものである。〈召人〉とは、「主人と主従関係にある女房で、身分の低さから正式な結婚を經ていないが主人と男女の関係にあることをその属性とする」もの。〈召人〉であるならば、身分相応の関係を保てよう。しかし、明石君はそれを肯んじない。「女はた、なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなしきこえたれば」、「心くらべにて」時は過ぎていくのであつた(同・二五〇〜二五一頁)。

明石の浜に秋風が吹く頃、源氏は「とかく紛らわして、こち参らせよ」と入道に申し入れる。「人進み参らば」と考へていた源氏が「参らせよ」と言葉が発するようになったことは、源氏のなかの明石君の存在がますます重くなつたことを示しているが、この時も、明石君は「さらに思ひ立つべくもあらず」と語られる(同・二五三頁)。

明石君のこうしたうち解けぬ態度に、源氏はこれまでにはない焦燥を感じる。

うちやすらひ何かとのたまふにも、かうまでは見えたてまつらじと深く思ふに、もの嘆かしてうちとけぬ心ざまを、こよなうも人めきたるかな、さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるに侮らはしきにや、とねたうさまさまに思しなやめり。情なうおし立たむも、事のさまに違へり、心くらべに負けんこそ人わろけれ、など乱れ恨みたまふさま、げにもの思ひ知らむ人にこそ見

せまほしけれ。

(同・二五六～二五七頁)

光源氏が明石君の居所に忍び寄った場面。何かとことばを尽くす源氏に對して「かうまでは見えたてまつらじと深く思ふ」明石君はうち解けようとはしない。源氏は「さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを」とし、都のかなり高い身分の女性、たとえば藤壺や六条御息所でも自分が言い寄れば靡かなかったものはいなかったと都の高い身分の女性たちと比べつつ「ねたく」思うのであった。

「伊勢の御息所にいとうおぼえたり」という光源氏の認識に對して、玉上琢彌は次のように述べる。

いま伊勢にいる御息所は、大臣の姫であり、桐壺帝の弟君である前坊の御息所になった人である。前坊が若死になさる事がなかったら、後の位にも上ったかもしれず、明石に比べると身分は格段に上である。しかし物を隔てて想像される「ほのかなるけはひ」が御息所によく似ている、と言う。身体つき、動作、声の出し具合、そしておそらく性格まで似ている、と作者はいいたいのかもしれない。御息所は嫉妬心が強く、生霊や死霊に出るので物語中の有名であるが、それはさておき教養の深さ、気位の高さ、態度もこの立派さなどに類似を求めようとしたのではないかと思われる。光る源氏が決して粗略にはできない人物として描いていくうとするのである。<sup>18)</sup>

けつして自分に靡こうとはしない彼女の物腰は、都の高貴な女性に劣らぬものとして源氏に認識されたのだろう。明石君は光源氏に心を固く閉ざす。その閉ざした心が、光源氏にはこのうえなく高貴な女性として感知されるのであった。光源氏が感じとった明石君の「けはひ」とは、こうした源氏に「ねたし」と思わせるほどの心の有り様によるものとひとまずは理解できようか。

しかし、それにしても、なぜ「伊勢の御息所」なのであろうか。玉上の指摘にあったように「伊勢の御息所」は、「前坊が若死になさる事

がなかったら、後の位にも上ったかもしれない、明石に比べると身分は格段に上である」人物である。明石君の「けはひ」が「伊勢の御息所」のそれと重ね合わされる必然性、およびその物語的意義をさらに考えてみたい。

#### 四、伊勢の御息所と海竜王の后

増田繁夫によれば、「御息所」とは「別殿を賜るような人をいい、殿舎の片隅や廂に局するような女房程度では、天皇の子を産んだ人であっても、普通は御息所とは呼ばれなかった」という。<sup>19)</sup>すなわち、「御息所」は、天皇の子を生んだすべての女性をさすものではなく、そのなかでも天皇や春宮に格別に重んじられた女性たちのことと考えられるのであるが、受領の娘である明石君の「けはひ」が、源氏の主観とはいえ、いまそうした人物たちのひとりである「伊勢の御息所」と重ね合わされるのであった。

思えば、明石君もかつて「后」になるべき人物とされたことがあった。

「さて、そのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人々、「海竜王の后になるべきいきむすめなり」、「心高き苦しや」とて笑ふ。

〔若紫〕一―二〇三―二〇四頁)

「若紫」巻における明石一族の噂話。父入道が明石君に對して「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と遺言しているとの話を聞いた人びとが「海竜王の后になるべきいきむすめなり」と笑うので

あった。この「海竜王の后になるべきいつきむすめ」ということは、この会話のなかでは「海に入りね」という言辞から導き出された軽口である。しかし、「代々の国の司など」の求婚を遠ざけ、「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」との遺言を常に受けつつ養育されているというこの女性に、確かに人間の男の手の及ばぬものとしての印象を与える。

高崎正秀は、明石君に「いなびづま」としての性格を指摘しつつ、次のように述べる。

〈海の水の女〉明石上、それは明らかに水辺の否び妻として、嘗て古く、土地を同じくして栄えた芦屋の菟会少女、播磨風土記載せる処の播磨の大郎女の同じ流れを追ふ物語であり、遠く東国にまで流布喧伝された真間手児奈なども、一つ根生ひの妻覓ぎの古譚であつたことがわかるのである。<sup>20</sup>

『播磨風土記』の「印南別嬪は、景行天皇の求婚を避けて加古川の川口の島に隠れ、『万葉集』等における真間の手児奈や葦屋の菟原処女は、複数の男性に求婚されながらも誰とも結婚することなく入水を遂げるが、これら男性の求婚を拒む女性たちは、神に仕える巫女ゆえに人間の男性との結婚を避けねばならない「いなびづま」であり、高崎は、明石君もその系譜にあるとしたのであつた。人間の男との結婚を拒絶するこうした女性たちの物語は、「いなびづま型」（「いなびづま型」とも）というひとつの話型としてとらえ得る。「いなびづま型」とは「男に求婚された女が、拒否の姿勢を示すパターン」の物語であり、『竹取物語』のかぐや姫をその典型として、『源氏物語』では朝顔姫君や宇治の女君にもその投影が認められている。また、こうした形式をとらない嫁盗み譚は、たとえば『大和物語』の安積山の章段（一五五段）、『伊勢物語』の鬼一口の章段（六段）や一二段などのように、悲劇的な結末を迎えるのが常であつたとされる。藤井貞和は、明石君と光源氏との邂逅の場面における「近かりける曹司の内に入りて、いかで固めけるにかいと強き」（『明石』二二二五七頁）という表現について、「逃げ

かくれする否び妻の古い習俗がここにかさなり落ちていくように思える」と指摘するが、「いなびづま」としてのあり方は、その表現にとどまらず、もっと広範に明石君の物語をかたどっているのではなからうか。

神の嫁——。神に仕える女性は人間の男を拒絶しなければならぬ。折口信夫は、それを「神の嫁」と呼んだ。

一体、神に仕へる女といふのは、皆「神の嫁」になります。「神の嫁」といふ形で、神に会つて、神のお告げを聴き出すのであります。だから神の妻になる資格がなければならない。即、処女でなければならぬ。人妻であつてはならない。そこで第三の処女といふものが出来てくる。人妻であつても、ある時期だけ処女の生活をする。さういふ処女の生活が、吾々の祖先の頭には、深く這入つて居たのであります。<sup>24</sup>

神に仕える巫女は、それゆえに人間の男を拒絶する。拒絶することがすなわち「神の嫁」になるべき資格なのであつた。「若紫」巻において、明石君を「海竜王の后になるべきいつきむすめ」と人びとが評したのは、それが軽口であつたとしても、その逢いがたさを感じたからにほかならない。地上の男との結婚を拒絶し、「神の嫁」となるべき女性。それが明石君がその物語における登場から身にとつた面影なのであつた。

事実、明石入道はその夢の実現のため、明石君を住吉神のもとに参詣させていると語られる。

住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。  
女の童のいときなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋  
ごとにかならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤  
めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を  
高き本意かなへたまへとなん念じはべる。

「明石」巻で登場する明石君は、住吉神に帰依する女性として位置づ

けられているといつてよからう。このように考えてみると、「海竜王の后」とは、物語における明石君のあり方を強く規制する言辭であったと思われるのである。

一方、「伊勢の御息所」は、齋宮とともに伊勢に下った六条御息所の呼称である。「伊勢の御息所」という呼称は、六条御息所に「伊勢」の印象を抜き差しがたく刻み込んでおり、その名に負う「御息所」も、「伊勢」と結びつけられることによって、東宮の寵后よりも神にめであられる存在としてのあり方を形象化させている。六条御息所には「齋宮や伊勢と緊密な関係を持ち、あたかも天照大神に仕える巫女の如きイメージを付与されている」ことは認めてよからう。いま、伊勢において人間の男との交流を断ち切り、神に近く生きる六条御息所は、確かに「神の嫁」としての性質を帯びていたのであった。

「海竜王の后」である明石君と「伊勢の御息所」である六条御息所。ふたりは、この時、とても近しい存在として物語にあるといえよう。明石の浜の闇のなか、みずからの「身のほど」を思つて身を固くする明石君の「へけはひ」に、光源氏は神に仕える女性の面影を感じ、その脳裏に「伊勢の御息所」が引き寄せられてくる。あるいは、光源氏は明石君の「へけはひ」の背後にそうした神の存在をかぎわけたといった方がよいのかもしれない。都から遠く離れた地で神に仕えるものであるかのごとく自分を拒絶する明石君。光源氏にとって、こうした明石君の魂の面影というべきものをたとえるのにふさわしい女性は「伊勢の御息所」以外にはいまい。光源氏は明石君の「へけはひ」を感じとりながら、いまは「伊勢」という神域に暮らす六条御息所に思いを馳せる。「海竜王の后」という異郷の女が、かつて深く愛した「伊勢の御息所」にも比肩すべきものとして光源氏のなかで血肉化されていく。そして、それは、「海竜王の后」という侮蔑を含んだ呼称を負っていた明石君が、光源氏の前に「伊勢の御息所」と同じ重みを持った女性として顕現した瞬間なのでもあった。

## 五、「明けぬ夜」の形象

明石君と一夜を過ごした光源氏は、世間体を気に病みながらもたびたびこの岡辺の宿に通うようになり、やがて明石君は光源氏の子を宿すこととなる。しかしながら、ふたりのこの生活は長くは続かない。翌年の七月二十余日、光源氏召還の宣旨が下ったのである。都への旅立ちが明後日に迫った夜、光源氏はいつともとは異なり、あまり夜が更けないうちに明石君のもとを訪れる。この時、ふたりは互いの顔をはじめで見つめ合い、別離に涙するのであった。

さやかに、めざましうもまだ見たまはぬ容貌など、いとよししう気高きさまして、めざましうもありけるかなと見棄てがたく口惜しう思さる。さるべきさまにして迎へむと思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰めたまふ。男の御容貌ありさまはた、さらにも言はず、年ごろの御行ひにいたく面瘦せたまへるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心苦しげなる気色にうち涙ぐみつつあはれ深く契りたまへるは、ただかばかりを幸ひにても、なかやまざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、わが身のほどを思ふも尽きせず。  
 (「明石」二―二六四頁)

光源氏は明石君の「さやかにまだまだ見たまはぬ容貌」を目にして「見捨てがたく口惜しう」思い、明石君は「男の御容貌ありさま」の「めでたき」様子につけても「わが身のほど」を噛みしめないではいられない。人目を忍ぶ光源氏が通うのは、いつも夜の闇のなかであった。ふたりはこれまでお互いの「容貌」をはつきりと見ることはなかつたのである。

素顔を知らぬまふたりは出会い、ともに時を過ごし、そして別れにあたってはじめてその素顔を知る。いうなれば、ふたりは互いの本来の姿を明らかにすることなく結婚生活を送っていたのであり、こうした結婚の様式は、三輪山式神婚譚と呼ばれる話を想起させる。三

輪山式神婚譚とは、「神または神の子が正体を隠し、人間の乙女に通っていたがその素姓を暴かれ、永遠の別れを余儀なくされるといふモチーフの物語」であるが、この話型の特徴のひとつは男が正体を明かさぬまま女性のもとを訪れることにある。たとえば、「神武記」においては三輪の大物主神が川に流れる丹塗矢に姿を変えてセヤダトラヒメのもとを訪れ、「崇神紀」においては顔を隠して通ってきた大物主神の正体を知ったヤマトトトヒモソヒメは箸を陰に突き刺し自害してしまう。また、「崇神記」ではやはり正体を隠して通う大物主神の正体をイクタマヨリビメは男の衣の裾につけて麻糸によつて知ることとなる。男が正体を隠すのは神ゆえであり、神は「正体不明な存在として通うのでなければならなかった」のである。もちろん、光源氏が夜陰にまぎれて明石君のもとに通ってくるのは、世間の目をはばかったためであり、その結果として別離にあたってはじめて互いの容貌を見ることがいった展開をとげる。しかし、そうしたふたりの結婚の様式は、〈神の嫁〉との結婚としてふさわしいものであったといえよう。〈神の嫁〉に通うものは、やはり〈神〉の資格をもつものでなければなるまい。明石君と光源氏の結婚は、神婚譚の口吻をもつて語られていくのであった。

このように考えてくると、このふたりの邂逅をめぐる物語には、住吉神、伊勢神、そして三輪神の影が透かし見えてくるが、このことについては、後藤祥子に興味深い指摘がある。後藤は、「源氏物語」の「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」という表現の背後に、「古今集」九八二番歌を核として生成された歌語りの存在を想定し、その表現の必然性を説く。すなわち、『俊頼髓脳』などの歌学書においては、男女とも未練を残しながら別れるという神話とは異なる三輪にまつわる歌語りが残されており、そこでは『古今集』九八二番歌「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(巻一八・雑歌下・読人しらず)が「恋しくはとぶらひ来ませ千早振三輪の山もと杉たてるかど」などと捨てられた女性の歌のように伝えられるとともに、たとえば『綺

語抄』では「むかし三輪明神すみよしの明神にすてられてよみ給へる歌」として載せられていることから、『古今集』九八二番歌が「十世紀頃すでに、住吉明神に棄てられた三輪女神の未練をにじませていたとしたら、「賢木」以後の源氏が須磨・明石の流謫を経て住吉の冥助により帰還を遂げる(すなわち住吉男神と重なる)不思議な吻合も無視できない」とし、「伊勢御息所(六条)」と明石の女が、源氏の目に思いなし似通ってみえるのは、後代歌話がなげなく結んでみせる伊勢・三輪・住吉の因縁の糸が、ここでもひそかにはたらいっているのであるかも知れない」と指摘する。ただし、後藤も述べているように、赤染衛門歌「我宿は松にしろしもなかりけり杉むらならはたつねきまし」(私家集大成・赤染衛門I・二〇〇)や、「賢木」巻における六条御息所の歌「神垣はしろしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ」(「賢木」二一八七頁)などには「しろしの杉」を鍵語として男に棄てられた女性の姿がかたどられていることが認知できるものの、こうした三輪明神の歌語りが「いつ頃どのように成長したのであるか明確には押さえがたい」のは確かである。しかしながら、『源氏物語』成立当時における歌語りの存否についてはともかくとして、こうした歌語りを念頭において、いまいちど「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」という表現を見つめ直す時、明石君にはこれまでとは異なる姿を見出すこととなる。それは、光源氏とはじめて邂逅する場面でありながらも、棄てられる女性としての姿である。

思えば、六条御息所の〈けはひ〉とはへものけ」とともに顕現するものでもあった。先に見たように、『葵』巻においてへものけ」として葵上に取り憑いた六条御息所と光源氏が対座する場面では「なげきわび」と歌う声や〈けはひ〉が葵上のそれではなく、六条御息所のもとに変わってしまったと語られていた。六条御息所の〈けはひ〉は、「心にくし」といった表現によつて形容されるものであるが、この〈けはひ〉はそれとは大きく異なる。終末を迎えた愛にいつまでも追いつかないではいられない、自身でもいかんともしがたい愛執の炎

に身を焦がす女性のどす黒い情念のへけはひゝなのであった。  
その愛執の闇は、六条御息所が伊勢に下った後も晴れることはない。  
須磨に流謫した光源氏に伊勢の六条御息所から次のような消息文が寄せられる。

なほ現とは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなん。さりとも、年月は隔てたまはじと思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。……〔須磨〕二一九三〜一九四頁

あなたの須磨のお住まいの様子をうかがうにつけても、「明けぬ夜」の闇に迷っているのではないかと思います。あなたが帰京なさる日はそう遠くはないでしょうが、この「罪深き身」があなたとお会いするのはるか先のことでしょう。光源氏の須磨流謫を知った驚きを六条御息所は、「明けぬ夜の心まどひ」と表現しているが、それは光源氏の愛執ゆえに沈む六条御息所自身の無明長夜の闇とも重なっているだろう。六条御息所は源氏への愛の代償として得た「罪深き身」を抱えながら、いまだ「明けぬ夜」の闇のなかにいるのである。

源氏との邂逅の場面で、明石君は歌っていた。

明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ

「明けぬ夜に」「まどへる心」という表現は、確かに六条御息所の消息文の表現と類似している。宗雪修三はそのことを指摘したうえで「明けぬ夜」という言葉が媒介となつて六条御息所の消息を呼び起こし、さらに御息所そのひとのおもかげをも引き出していると考えられよう」と述べ、<sup>30</sup>「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」の表現が呼び起こされる契機がこの「明けぬ夜」という言辞にあると見る。だが、それはたんなる言葉の連鎖にとどまるものではあるまい。藤井貞和が「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」の表現について、「彼女のしぐさ一般をさしている」と読むよりは、やはり文脈的にみると、うたを詠みかけるその声、うたに押しこめられる情念が、六条御息所に似ている、源氏はそれを感じとつたのだ。女としての人生上のくるしみをのこし

て京を出ていったひとは六条御息所以外ではない」と指摘するように、「明けぬ夜」の歌には「女としての人生上のくるしみをのこして京を出ていったひと」の「うたに押しこめられる情念」が感取される。明石君が「明けぬ夜」と歌い、それが「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」と源氏に感知される時、そこには終わりを告げた愛なものにもかかわらず、なおもそれを忘れることができずに無明長夜の闇のなかに迷う女の姿がゆらめいているのであった。

光源氏を迎える明石君の居所の風情は、次のように語られる。

三味堂近くて、鐘の声松風に響きあひてもの悲しう、巖に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧す。むすめ住ませたる方は心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口けしきことにおし開けたり。〔明石〕二二五六頁

「松風」に響く三味堂の鐘の音。巖に生えた「松の根ざし」。声を尽くす秋の虫。そして「けしきことにおし開け」られた「月入れたる真木の戸口」。いずれもが光源氏を招き入れるようにしつらえられている。しかし、光源氏との邂逅場面における明石君のあり方からいまいちどこの場面を読むとしたらどうであろうか。先の赤染衛門歌には「我宿は松にしろしもなかりけり杉むらならはたつねきなまし」とあった。「しろしの杉」のない「松」は訪れることはない男を、それでも待たずにはいられない女性の姿を形象することとなる。鐘の音と響き合う「松風」もまた同前である。あるいは、ここに、おなじ微子の歌「この音にみねの松かせかよふらしいつれのをよりしらへそめけん」が引かれていた、あの野宮の別れの場面を想起することも可能であろう。はるけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがねなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのことも聞きわかぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。〔賢木〕二一八五頁

明石の地で鳴いている「虫」も「松虫」であったのかもしれない。こ

の場面と照らし合わせるとそのようにも思われてくるが、いずれにしても、明石君のもとに向かう光源氏が目にした岡辺の風情は、六条御息所が心を尽くして暮らす野宮の情景を想い起こさせる。光源氏は、「松風」の響きに招き寄せられるようにして、この明石の地でふたたび六条御息所的なるものと邂逅しようとしているのであった。

明石君と六条御息所は、光源氏のなかに結び合わされる。この近いものたちは、しかし、とても遠いものたちでもあった。光源氏と六条御息所との愛は激しい葛藤の末に終わりを告げ、明石君とのそれはいままさに始まろうとしている。明石君の〈けはひ〉が「伊勢の御息所」のそれと重ね合わされる時、明石君と光源氏との間には、強く近づけようとする力と同時に、かぎりなく遠ざけようとする力がぎびしくせめぎ合っているといえよう。光源氏は、明石君を明石君として抱きとることができるだろうか。あるいは、明石君は、六条御息所のように光源氏の手のとどかない異界に姿を消すことになるのだろうか。物語はそうした両者の可能性を潜在させながら語られていくのであった。

## 六、「そびえ」る明石君

明石君と光源氏との邂逅場面は、次のようにとじめられる。

人さまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞしたる。かう  
 あながちなりける契りを思すにも、浅からずあはれなり。御心ざ  
 しりの近まさりするなるべし、常は厭はしき夜の長さも、とく明け  
 ぬる心地すれば、人に知られじと思すも心あわたたしうて、こま  
 かに語らひおきて出でたまひぬ。

〔明石〕二二五七〜二五八頁

ふたりの邂逅場面において、明石君の〈けはひ〉が語られるのはこれで三度目である。光源氏が明石君の居所に忍び入った時の「しどけなき」〈けはひ〉、和歌を贈答した後の「伊勢の御息所」を想起させる「ほ

のかなるけはひ」、そして、この箇所における「人さまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひ」である。坂本和子は、明石君は「いとあてにそびえ」た様をして、「心はづかしき」けはひの女性であった。そしてその様子は伊勢にある御息所に非常に似ていた」と説明し、藤井貞和は「ここにも六条御息所のけはひを読みとる坂本氏の論考は正解であろう」とそれを支持しているが、どうであろうか。玉上琢彌が「人さまいとあてにそびえて」の前に「抱いてみれば」という語を補って解しているように、この箇所の〈けはひ〉は、逢瀬の後に光源氏によって感じ取られたものであり、先の〈けはひ〉とはおのずから相違している。光源氏は、闇のなか、徐々に明石君ににじり寄っていった。三つの〈けはひ〉は、明石君に近づいていくごとに源氏が感知していったものであり、この場面の最後に語られた〈けはひ〉とは、ふたりの距離がなくなり、光源氏が直接みずからの腕のなかに感じた明石君のそれなのであった。

明石君の「人さまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひ」によって、光源氏は明石君に深い愛情を抱くようになったとおぼしい。「かうあながちなりける契りを思すにも、浅からずあはれ」に感じ、「常は厭はしき夜の長さも、とく明けぬる心地」がしたのだという。「人に知られじ」といまだ世間体を気に病んではいるものの、語り手が「御心ざしりの近まさりするなるべし」と評するように、光源氏は明石君に逢うことによって、ますますその愛情を深めていったのである。

六条御息所の場合は違っていた。「六条わたりも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし」（夕顔 一一一四七頁）と語られるように、光源氏は六条御息所と逢ったとたん、彼女に背を向けるようになった。明石君は、六条御息所と何が違っていたというのであろうか。あくまでもそれを表現のなかから考えたとすれば、明石君の「人さまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひ」に目がとまる。

そびゆ——。六条御息所とは異なる明石君独自の資質を考えつつ物

語の表現をたどる時、この不可思議なことが浮かびあがつてくる。

『源氏物語』において「そびゆ」はこの箇所の一例が存するのみである。試みに古注釈を繙いてみると、「ほそやかなるすかた歟そひく」としたるといふ歟（『河海抄』<sup>35</sup>）、「そひえてとはやはらかにのみなくすこしすみたる体にや」（『弄花抄』<sup>36</sup>）、「河海説ほそやかなると云々いかゞ只人にうちむきて人まかせなるやうにはなきと也一かとあるさま也」（『細流抄』<sup>37</sup>）、「私ひたすら物やはらかにのみはなくけたかく心はつかしきさまなとありとみえたり ほめたる躰なるへし 俗にいへるかごとく物すさましくつきなきをそびえたるといふやうには心うへからず」（『岷江入楚』<sup>38</sup>）などあつてその語義理解は一致していないが、次の『紫式部日記』の用例を見ると、少なくとも「高く立つ」意をもつ現代語の「聳える」とは異なる語義を持つていたようだ。

宣旨の君は、ささやけ人の、いとほそやかにそびえて、髪のみすぢこまかにきよらにて、生ひさがりの末より一尺ばかりあまりたまへり。いと心恥づかしげに、きはもなくあてなるさましたまへり。ものよりさし歩みて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるる心地す。あてなる人はかうこそあらめと、心ざまものうちのたまへるも、おぼゆ。

（小学館刊新編日本古典文学全集・一八八〜一八九頁）

宣旨の君は「ささやけ人」で「いとほそやかにそびえて」と語られる。「ささやけ人」とあることからこの「そびえ」は「背が高い」などの意ではないことが了解される。遠藤充彦は、「そびゆ」には、「聳」があてられる「高く立つ」の語義をもつものと「すらり」としてほっそりとしている「の語義をもつものがあり、「そびゆ」およびそれに関連する語のうち、「高い」意を持つ語を「聳」群とし、それに対して、「すらり」としている。ほっそりしている「意を持つ「そびやか」「そびやぐ」「そびか」「そびそび」は「織、織長、細長」をあてることができる「別の一群」とすべきであるして、とくに後者の語群は本来は濁音ではなく「そひゆ」（ソイユ）、「そひやか」（ソイヤカ）、「そひや

ぐ」（ソイヤグ）、「そひか」（ソイカ）、「そひそひ」（ソイソイ）とあるべきか」と指摘する。清濁の区別はともかく、「ささやけ人」である宣旨の君の「そびゆ」は後者の語義であると理解しなくてはなるまい。その宣旨の君が「いと恥づかしげに、きはもなくあてなるさま」とされるように、「人さまいとあてに」「心恥づかしきはひ」をもつ明石君の「そびゆ」も「すらり」としてほっそりとしている「の語義」として理解してよからう。

ただし、平安時代の文学における「そびゆ」およびその関連語は、たとえば志水富夫の調査によれば、「そびゆ」は『源氏物語』に一例、『紫式部日記』に一例、『夜の寝覚』に二例、「そびやかなり」は『源氏物語』に五例、『紫式部日記』に三例、『夜の寝覚』に一例、「そびやぐ」は『源氏物語』に一例みられる程度で、その使用頻度はきわめて低いという。こうした状況について、主として「そびやか」を検討した米野正史は「この「そびやか」は紫式部の造語ではないが、後世はその作風を踏襲した『夜の寝覚』にしか現われない。これは「そびやか」が和文脈で使われる語ではなく、漢文訓読語としての要素が強いためと考えられる」としている。それが「漢文訓読語」であったかどうかについては即断できないものの、これらの「そびゆ」系統の語がその使用例からして少なくとも和文脈にあつては一般的なものでなかつたことは確認できよう。

それでは、「そびえて」と語られる明石君独自の資質とはどのようなものであるうか。『源氏物語』には「そびゆ」の用語例は当該箇所にはしか見いだせないが、「そびゆ」に関連する「そびやかなり」は五例あり、惟光の娘の五節舞姫、玉鬘、薫、玉鬘の中の君、宇治の中の君の描写において用いられている。これらの用例のうち、明石君と同様に、暗がりのなかで男性によつてとらえられた女性の例を考えるならば、惟光の娘の五節舞姫の例と玉鬘の例に注目することができよう。<sup>42</sup>

ただかの人の御ほどと見えて、いますこしそびやかに、様体などこのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければこ

まかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引きならいたまふ。

〔少女〕三一六一頁

雲居雁との仲を引き裂かれた夕霧は、虚ろな思いを抱えて「紛れ歩き」舞姫である惟光の娘を垣間見る。その様子は、雲居雁とほぼ同年齢ではあるものの、それよりは今少し「そびやか」であり、「をかしきところ」はまさっているかとさえ見えるという。「暗ければこまかには見えねど」とあるように、夕霧が五節舞姫を垣間見たのは暗がりのなかのことであり、その暗がりのなかにかすかに見える五節舞姫の「そびやか」な身体が夕霧を惹きつけていくのであった。そして、玉鬘の「そびやか」な姿が垣間見られるのも、また、かすかな光のもとでのことであつた。

されどほのかなる光、艶なることのつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを飽かず思して、げにこのこと御心にしみにけり。

〔螢〕三一二〇一頁

玉鬘の愛執に苦しむ光源氏は、玉鬘の近くに螢宮を招き入れ、集めておいた螢を放つ。螢の「ほのかな」光は玉鬘の「そびやか」な姿を浮かびあがらせ、螢宮のなかに「をかしかりつる」ものとしてもて刻み込まれるのであつた。

暗がりのなかに浮かびあがる五節舞姫と玉鬘の「そびやか」なる身体。ふたりの男たちは、それを「をかし」きものとして見る。そもそも「そびやか」とは、女性の美しさを示す形容としてももちろん一般的なものではない。「そびやか」について、先にもあげた志水富夫は「平安時代に於いても、使用例はきわめて少なく、しかも女性美を表す言葉としては、一部の作者に限られた使われた不思議な言葉である」と指摘しつつ、次のように述べる。

審美眼に個人差があるのは当然だが、「あてに」「かかやく」「きよげ」「つぶつぶとまろに」「なまめかし」「にほはし」「らうたげ」

などの画一的な形容語の中に、このように、ある一部の作者に片寄つて用いられているというのは興味深い現象である。<sup>43</sup>

たしかに、「そびやか」なる身体は、当時の女性美の範疇からは逸脱しているといえよう。異形の身体——。そのようにも呼ぶことができる身体をもつて、五節舞姫と玉鬘は物語のなかの暗がりに現れているのであつた。それを見たふたりの貴公子たちは、その異形の身体を「をかし」と感じ引き寄せられていく。ふたりの貴公子たちには、どこかこの世とは異なる異界から現れた女性のように思われたのではなからうか。

「そびゆ」に関連する語である「そびやく」も『源氏物語』には一例のみ用いられる。

言はむ方なき盛りの御容貌なり。いたうそびやぎたまへりしが、すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、かくてこそものしかりけれど、御指貫の裾までなまめかしう愛敬のこぼれおつるぞ、あながちなる見なしなるべき。

〔松風〕二一四一六〜四一七頁

大堰山荘に入った明石君は、久方ぶりに光源氏の「御容貌」を見る。そして明石の地においては「いたうそびやぎたまへりし」様子であつたが、いまは「すこしなりあふほど」になつたとの感想を持つのであつた。この描写は、明石の地における離別の場面において「年ごろの御行ひにいたく面瘦せたまへる」と語られていた源氏の容貌と符合するものであるが、明石という異郷の世界における光源氏の身体が「そびやく」ということばで表現されていることの意味は重視されてよいだろう。

このように見てきた場合、「そびえ」る明石君をどのように考えることができるだろうか。ここで注意しなくてはならないことは、先に見た五節舞姫、玉鬘の姿は暗がりとはいえ男の目によつてとらえられたものであり、「そびやく」とされる光源氏の姿も、そして「そびゆ」が用いられる『紫式部日記』の宣旨の君の姿も視覚によつてとらえられ

たものであったことである。明石君の場合は、暗闇のなかで、光源氏が視覚ではなくみずからの腕のなかで直接とらえたものであった。腕のなかにある「そびえ」るもの。それは、たとえるならば、周囲の暗闇にすつとのびて消えていく蛇体のごときものを想像させはしまいか。伊藤博は「住吉神社は筒男三神と神功皇后を祀るが、海神としての古い歴史を持ち、より本格的な神と目される筒男の「筒」は蛇体を意味するとも解されている。同じく海神としての竜王と重なるものがあり、竜も蛇も水を司る眷属として同類と見うる」と述べる。<sup>44</sup>「海竜王の後」もまた異形こそふさわしい。異郷にたたずむ「海竜王の後」明石君の描写としてこの「そびゆ」ということはとても似つかわしいものであるといえよう。異郷の女性である明石君固有の資質は、「そびゆ」という「不思議な言葉」によってかたどられていく。そして、それは「伊勢の御息所」とは異なる資質であり、光源氏が都のどの女性にも感じたことのないものであっただろう。「人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきはひ」を持った明石君とひとたび逢った光源氏は、明石君のこうした不可思議な「へけはひ」に引き寄せられるように夜な夜な明石君のもとに通うこととなるのであった。

かくして、その逢瀬の直後から「なのみ」な扱いになってしまった六条御息所と、「近まさりする」とされる明石君とは大きく異なる道を歩んでいくこととなる。しかし、明石君と光源氏はまだ出会ったにすぎない。ふたりの物語はようやく緒についたばかりなのである。

## 七、明石君の「へけはひ」

光源氏が感じとった「心恥づかしきはひ」は、確かに光源氏を魅了するものであった。ただし、それはあくまでも光源氏によってとらえられた「へけはひ」である。「へけはひ」がその人物の魂といったものと深くかかわるものならば、「心恥づかしきはひ」は明石君のいったいどのような魂の面影をかたどるものなのであろうか。

そもそも「海竜王の後」と噂される明石君は、物語における貴族社会においてはあくまでも受領の娘であり、明石君自身それを強く自覚していたのであった。

このむすめすぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。  
身のありさまを、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。父君、ところせく思ひかしづきて、年に二たび住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。

〔須磨〕二二二―二二二頁

「身のありさま」を「口惜しきもの」と思い知っている明石君は、「高き人は我を何の数にも思さじ」と考えている。だが一方で「ほどにつけたる世をばさらに見じ」とも思うのであった。「ほどにつけたる世」とは身分相応の結婚をさす。明石君は、「身のほど」をこえた結婚を望むべくもないと考えながら、その「身のほど」に応じた結婚をも拒絶しているのである。明石君のなかでここにあることの諦めと抗いとは交錯している。明石君は「身のほど」への自覚ゆえに、「ほどにつけたる世」を拒絶しつつも、「高き人」の求婚の可能性を否定するのであった。したがって、「命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ」という決意は、「もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りぬ」という明石入道の遺言とは、表現は似通うものの、位相を異にしている。明石入道はひたすら「思ひおきつる宿世」に邁進していけばよかつたのであるが、明石君はそうした確信めいたものを何も持つことができず、自身の「身のほど」に対する諦めと抗いのなかで、ひたすら身を固くするのであった。

この「身のほど」についての意識は、光源氏が明石の浜にやってきて以降、ますます明石君のなかで強まっていく。光源氏が側近くに移

住したことを知った明石君は「世にはかかる人もおはしけりと見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いとほるかに」思い（「明石」二二三八―二三九頁）、光源氏からはじめての手紙に「さし出でむ手つきも恥づかしうつましう、人の御ほどわが身のほど思ふにこよなく、心地あしとて寄り臥し」てしまふのであつた（同・二四八頁）。そして、頑ななまでに源氏を拒みながら明石君は次のように思う。

いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん、かく及びなき心を思へる親たちも、世ごもりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ

（同・二五三頁）

都から仮に下つてきた人のことばに容易くなびくのは「いと口惜しき際の田舎人」である。自分はそのようなものではないものの、「人数に思されざらん」ために、「いみじきもの思ひ」を負うであらうし、結婚を期待している親たちも「なかなかなる心」を尽くすことになるだろう。明石君は、自分のことをいつそ「いと口惜しき際の田舎人」と思えたら、源氏のことばに應ずることもできたのかもしれない。しかし、明石君にはそれを認めることができない。かといって、自分が源氏にとつての「人数」に入ると思える身分とも思えない。明石君は、「かくまで世にあるものと思したづぬるなどこそ、かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ」と源氏と文を交わしている現状にみづからを自足させるのであつた。

ここにおける明石君の思慮は、光源氏が明石に移住する前の意識とは大きく異なるものではないものの、以前と比べるとより現実的なものとなっていることに注意される。「人数にも思されざらん」ための「いみじきもの思ひ」とは、その対象を光源氏とした時の想定であらう。光源氏の都での他の女性たちとのかかわりを噂として耳にしていたであらう明石君は、そこでの生活を思い描き、みづからの「身のほど」

に沈思するのであつた。阿部秋生は「女性が男性を訪れて契りをかはすことは考へられないことであつて、それを敢へてすることは、自ら「召人」——源氏の召使女の境涯に身を落すことを、自ら肯定することであつた」と指摘するが、明石君の「身のほど」意識とは、「田舎人」として扱われることを拒絶すると同時に、「人数にも思されざらんものゆゑ」の「いみじきもの思ひ」をも忌避するものである。「身のほど」に対する諦めと抗いは、光源氏とのかかわりをも拒ませる。そして、光源氏が邂逅の折に感じとつた「恥づかしきはひ」とは、そうした「身のほど」意識を持つがゆゑの心の固さなのであり、この意識こそが源氏から明石君の身体を強く引き離すものであると同時に、光源氏を明石君に惹きつけてやまないものとなつていたのである。

明石から帰京後、大堰の山荘で明石君と再会した源氏は「こよなうねびまさりにける容貌けはひえ思ほし棄つまじう」と思い（「松風」二一四―一四四頁）、明石君の〈けはひ〉にさらに惹かれていくこととなる。しかし、都世界ににじり出てきた明石君には忍従の日々が待ち受けていた。

なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人々もかたはらいたがれば、しぶしぶにゑり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。帷子ひきやりて、こまやかに語らひたまふとて、とばかりかへり見たまへるに、さこそしづめつれ、見送りきこゆ。

（同・四一六頁）

光源氏が大堰山荘を後にする。「なかなかもの思ひ乱れ」、すぐに見送りに出てくることのできない明石君に対して、光源氏は「あまり上衆めかし」と非難めいた思いを抱く。この光源氏の心内には「呼べば、すぐ来る、そういう程度の身分である」との認識が込められていようが、女房たちに背中を押されるように「しぶしぶにゑり出」た明石君の「たをやぎたる」〈けはひ〉は、「皇女たちと言はむにも足りぬべ

し」と評される。この語り手の評価は光源氏のそれと大きく異なるものではなかったのだろう。光源氏は「帷子ひきやりて、こまやかに語らひたまふ」という行動をとる。ここでも明石君の「へけはひ」に惹かれる光源氏の姿が描かれているのであるが、光源氏の心によぎった「あまり上衆めかし」との思いは見過ぎることができない。明石にいた頃の「そびやぎたまへりし」姿ではなく、「すこしなりあふほどになりたまひにける」姿になった光源氏は、いまは都世界の権勢者として明石君の前にいる。明石の地において、光源氏は明石君に「やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり」との感慨を持ったが、明石では光源氏を惹きつけた明石君の「上衆めく」資質が、いまの光源氏にはめざわりなものとして映るのであった。都世界を形成する秩序のなかで、明石君はけつして「上衆」の範疇には入ることのできない女性であり、「上衆めかし」き言動はその秩序からの排除へと結びついていく。明石君が都世界で生きるためには、「上衆めかし」き言動は慎まねばならなかったのである。

明石君は大堰山荘で姫君を光源氏に渡した後もそこに留まり続け、六条院へと入っていくことになる。「海竜王の后」明石君と重ね合わされる豊玉姫<sup>47</sup>が海に帰っていったのに対して、明石君が明石に帰らないことについては、『源氏物語』正編の大きな謎<sup>48</sup>ともされるが、いずれにしても、六条院の世界に残った明石君は、みずから卑下し続けながらそこに生きることとなる。「松の木しげ」き六条院の冬の町<sup>49</sup>「少女」三―七九頁）において、明石君は、光源氏の訪れをひっそりと待つしかない。しかし、明石君は「徹底した「身のほど」意識によって、自らを微小の存在として封じこめなければならぬ現実の過酷さに堪え<sup>49</sup>、そして堪え抜いたのであった。

石川徹は「六条院の世界では、いわば、海竜王にあたるのが太上天皇に准ぜられる光源氏で、明石の上はその后になったようなものである」と述べる<sup>50</sup>。確かに、明石の地における明石君は「海竜王の后」の面影を揺曳していた。しかし、六条院の明石君の姿を追っていくと、

そこにおける明石君は、「上」と呼ばれることさえないように六条院に君臨する「后」とみることができない。もし六条院における明石君に「海竜王の后」の姿を見いだすことができないとすれば、それは明石君の前にいる光源氏が「海竜王」ではないということなのだろう。光源氏が主催する六条院は四方四季の構造を持っており、「海竜王」の邸としてふさわしいとはいえよう<sup>51</sup>。しかし、その六条院において、明石君が卑下する姿をさらし続けることは、そこが「海竜王の后」である明石君が本来住まう場所ではないことを明らかにしていくことなのであった。

卑下の態度をとる明石君の前には、六条院における秩序の管理者としての光源氏の姿が浮かびあっている。東原伸明は「光源氏が海龍王なのではなくて、明石の君という巫力のある女性を魂の次元からめ取ることにしているのみ、海龍王的性格を発揮できるのではないか」とするが、明石君の前の光源氏が「海龍王」でないとすれば、女性たちの魂をひきつけてやまない「へいろごのみ」の王<sup>53</sup>としてかがやいているだろうか。たとえば、「野分」巻。野分に吹き荒らされた明石の町に光源氏が訪れる。「小桂ひきおとして、けぢめ見せる」明石君に対して、光源氏は見舞いだけを述べて、「つれなく」立ち去る。その後ろ姿を見送りながら明石君は「心やましげ」な面持ちでひとり歌うのであった。

おほかたに荻の葉すぐる風の音もうき身ひとつにしむ心地して

（「野分」三―二七七頁）

光源氏の訪問が形ばかりであるのも、そうした光源氏を明石君が礼節をもって迎えねばならないのも、六条院の秩序からすれば当然のことではあった。しかし、「けじめ」を見せながらも「心やましげ」に「うき身」を見つめる明石君の姿は、へいろごのみ<sup>54</sup>の王としての光源氏をきびしく問い直すものとなっていよう。六条院の北西の片隅で、明石君は卑下の態度貫きながらも、心を固く閉ざしていく。そしてその心は光源氏には見えぬところまで遠ざかっていくのであった。

「若菜上」巻において、「同じ筋にはおはずれど、いま一際心苦しく」

と身分にふさわしい愛情を受けない女三宮を念頭に置きながら次のように思う。

わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける。やむごとなきだに思  
すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにし  
あらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし。

〔若菜上〕四——一三二頁

明石君は、自身の「宿世」を「いとたけく」思う。紫上や女三宮といつた高貴な女性でさえ思いどおりにゆかぬ「世」。ましてそれらの人びとと肩を並べるべきわが身ではないのだから、「すべて、今は、恨めしきふしもなし」とするのであった。こうした明石君について、阿部秋生は「誇り高く持して、出過ぎもしないが、卑屈にもならないといはれた、かつての明石の君の面影は殆どなくなつてしまつてゐるやうである」と評したが、藤原克己は「彼女の心高さが、光源氏や六条院の秩序によつて、あるいは彼女自身の身のほど意識したいによつて、きびしく抑圧されながらもそれに抵抗し、あるいは忍従しつづ、かろうじてわが身を「たけく（高）く」思うというのが、明石の君の人物造型に一貫する基本型である」とし、その「たけき心地」とは「愛情の充足を断念すること引き換えに得られた」ものであると説く。そもそも明石君は「人数にも思されざらむものゆゑ」の「いみじきもの思ひ」に怯えていたのであった。その明石君が、いま、その「人数にも思されざらむ」わが身を「たけく」思う。「いみじきもの思ひ」は愛情への期待とその裏切りによつて生じるものだろう。明石君にとつていま目の前にいる光源氏はいまや「海竜王」ではなく、明石君の魂を領有するものはずでこの地上にはいない。明石君はもはや光源氏の愛情への期待そのものを持ち得ず、したがつて彼女は「いみじきもの思ひ」からも解き放たれることとなる。鈴木日出男は「明石の君が、女御の実母として遠からぬ将来の国母の実現こそが第一の恃みであると期待するとき、その謙抑さは従前の六条院秩序を維持するものであるとともに、明石の君個人の自立としてそこから逸脱しうるしたたかさを

はらんでゐる」とするようになり、「すべて、今は、恨めしきふしもなし」とは、「やむごとなき」女性たちが苦しむ六条院世界に背をむけた明石君のひそやかな嘆きである。六条院のなかで「人数にも思されざらむものゆゑ」の忍従の生活を送つてきた「海竜王の後」明石君の心は、この地上のどこにもいない「海竜王」のもとに召されていくといつてもよからうか。

〔若菜下〕巻の女楽の折に明石君は次のように語られる。

かかる御あたりに、明石は気おさるべきを、いとさしもあらず、もてなしなど気色ばみ恥づかしく、心の底ゆかしきままして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小桂着て、羅の裳のはかなげなるひきかけて、ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心にく侮らはしからず。高麗の青地の錦の端さしたる褥に、まほにもるで、琵琶をうち置きて、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかにつかひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またありがたくなつかくして、五月まつ花橘、花も実も具して押し折れるかをりおぼゆ。

〔若菜下〕四——一九三頁

他の女性たちと並ぶと明石君は圧倒されてもおかしくないのだが、そうではなく、物腰などは「気色ばみ恥づかしく」、「心の底ゆかしきままして」、「どこことなく」あてになまめかしく「見えるのだという。そして、その様子については「ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心にく侮らはしからず」とされる。ことさらに「卑下」はしているけれども、奥ゆかしく、侮ることのできない「けはひ」。明石君はこどもでそうした「けはひ」に包まれている。六条院世界において明石君は卑下の態度をとつてきた。それが六条院の秩序のなかで生きる彼女の身の処し方であり、それはここでも変わることがない。しかし一方で、明石君は人に侮られることのない「けはひ」をも身にまとい、これはこの地上の誰にも領じられていないその魂のあり方を示すもので

あろう。そうした明石君が「五月まつ花橘、花も実も具して押し折れるかをりおぼゆ」と表現される。「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』夏・読人しらず・一三九）をひくこの表現は、源氏によって「明石の君の美質が、流離時代への回想とともに思われ」ていると同時に明石君の「出自の低さを超える内面的な魅力」が示されているとされるが、ここに至って明石君を喩えるものは人を待つ「松」ではなく、「五月まつ花橘」である。みずからの「身のほど」にあがきながら長い忍従の年月を過ごし、一族の夢の実現をまのあたりにしつつある明石君にとって待つべきものは、少なくとも「昔の人」ではなからう。

明石の暗闇のなか、明石君に忍び寄る光源氏は、近づくとそのへきはひに惹かれていく。明石君の居所に足を踏み入れた光源氏は、「しどけなき」へきはひを感じ、歌を詠む明石君には「伊勢の御息所」を想起させるへきはひを感じた。そして、腕のなかの明石君には「人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしき」へきはひを感じとるのであった。闇のなかにゆらめくそのへきはひは、明石君の身体を透かして光源氏の前に顕現しており、光源氏は明石君の魂の面影といったものに直接ふれるがごとき感覚をもったことであろう。その過程にあつて、光源氏のなかに一瞬よぎった「伊勢の御息所」の面影。その女性性は光源氏にとって神々しくも、また疎ましくもある女性であった。そこに呼びおこされる「伊勢の御息所」という表現は、異郷の女性である明石君を物語に参入させるとともに、ふたたび異郷に追いやってしまう可能性をも含み持つものであった。しかしながら、明石君と逢った光源氏はそれとは異なる明石君のへきはひを感じとる。それはこれまでで逢った女性の誰とも似ていないへきはひであった。明石君と光源氏との邂逅場面における物語表現は、脈動しながら光源氏と明石君とを結びつけ、明石君を希有な人生へと歩ませていくこととなる。

その人生とは、「海竜王の后」と受領の娘という異なる属性を身に負いながら、一族の夢が実現へとむかう物語のなかでみずからの「身のほど」を見つめ、苦悩し続けながら生き抜いた生の軌跡であったといえよう。

「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所によろおぼえたり」と語られた明石君は、誰とも似ていない生を生きていくこととなる。それは、明石の闇のなかで身を固くする明石君にも、明石君に惹かれていく光源氏にも想像さえできないことであつた。しかし、暗闇のなかで光源氏に感知された明石君のへきはひは、明石君その人をいやおうなく物語の大きなうねりのなかにひき込んでいくのであつた。

## 注

- 1 『源氏物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集に拠り、巻名、巻数、頁数を付す。
- 2 新編全集「明石」二二二五七頁、頭注。
- 3 『源氏物語評釈』三一三二〇頁。
- 4 「光源氏の系譜」『國學院雜誌』七六一二（昭和五〇年二月）。
- 5 「六条御息所と明石上」『いとようおぼえたり』という視点―『国文学』七七（昭和五三年三月）。
- 6 「もうひとつのゆかり―桐壺更衣・六条御息所から明石の君・明石の中宮へ」『源氏物語 歌と呪性』若草書房（平成九年）。
- 7 「明石の女と伊勢の御息所」『古代中世国文学』四（昭和五九年八月）。
- 8 「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所に―物語社会を紡ぐ人間関係」『国文学』四五一九（平成二二年七月）。
- 9 「源氏物語その散文の純粋性」『源氏物語枕草子の国語学的研究』有精堂（昭和五二年）。
- 10 「中古の「けしき」と「けはひ」―パラダイムの「考察」―『立教大学日本文学』六四（平成二年七月）。
- 11 岩原真代「けはひ」林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房。
- 12 土方洋一は、「血がつながっていること、へ似ている」ことの基底に

- 魂(タマ)の共有をイメージするような靈魂観」が平安時代の人び  
 とももあつたとする(「へゆかり」としての身体―光源氏の幻想のか  
 たち―)『源氏研究』二(平成九年四月)。
- 13 「源氏物語」反転するテキスト―桐壺―巻からの見晴らし―『国語  
 と国文学』六一―一一(昭和五九年一月)。
- 14 池田節子は「他人の空似」ととらえる(「似ている」人々―光源氏と  
 冷泉帝を中心に―)『家と血のイリュージョン』叢書想像する平安文  
 学(六) 勉誠出版(平成一三年)。
- 15 新編全集「明石」二―二五〇頁、頭注。
- 16 百瀬明美「召人」林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房。
- 17 玉上琢彌は「前に」人進み参らばさる方にても紛らはしてむ」と思っ  
 ていた光る源氏にしてはたいへんな讓歩である。こちらにつれてく  
 るように、と自分からいったのであるから」と評する(『源氏物語評  
 積』「明石」三一―三三頁)。
- 18 『源氏物語評釈』「明石」三一―三二―三三頁。
- 19 「女御・更衣・御息所の呼称―源氏物語の後宮」『源氏物語と貴族社  
 会』吉川弘文館(平成一四年)。
- 20 「源氏物語の構想と其の成立過程」『源氏物語論』高崎正秀著作集(六)  
 桜楓社(昭和四六年)。
- 21 太田敦子「隠み妻型」『源氏物語事典』大和書房。
- 22 林田孝和「嫁を盗む物語」『源氏物語の精神史研究』桜楓社(平成五  
 年)。
- 23 「明石の君 うたの挫折」『源氏物語入門』講談社学術文庫(平成八  
 年)。
- 24 「古代生活に見えた恋愛」『古代研究(国文学篇)』折口信夫全集(一)  
 中央公論社(平成七年)。
- 25 久富木原玲「天照大神の巫女たち―六条御息所、そして源典侍」『源  
 氏物語 歌と呪性』若草書房(平成九年)。
- 26 林田孝和「三輪山式神婚譚」林田孝和他編『源氏物語事典』大和書  
 房。
- 27 多田一臣「神婚説話」大久間喜一郎他編『上代説話事典』雄山閣。  
 「三輪・葛城神話と「夕顔」「未摘花」」『源氏物語の史的空間』東大
- 29 出版会(昭和六一年)。  
 たえば、光源氏が野宮を訪問した折、「とかくうち嘆きやすらひて  
 るざり出でたまへる御けはひいと心にくし」(「賢木」二―七八頁)  
 と表現されるのに対して、新編全集頭注は「心にくし」は、御息所  
 に特有の、奥ゆかしい風情」と注する。
- 30 「権本」巻における和歌言語の方法』『名古屋大学国語国文学』四  
 三(昭和五三年一月)。
- 31 藤井貞和前掲23論文。
- 32 坂本和子前掲4論文。
- 33 藤井貞和前掲23論文。なお、藤井は続けて「玉上氏の『評釈』(『角  
 川文庫』も)に「抱いてみれば」とある。六条御息所にかよう女体  
 のエロティシズムは源氏をこの一瞬よくとらえたものとみなければ  
 ならない」と述べている。
- 34 『源氏物語評釈』「明石」三一―三二頁。
- 35 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』角川書店。
- 36 伊井春樹編『弄花抄』源氏物語古注釈集成(八) 桜楓社。
- 37 伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』源氏物語古注釈集成(七) 桜楓社。
- 38 中野幸一編『岷江入楚』源氏物語古註釈叢刊(七) 武蔵野書院。
- 39 「そびゆ」「そびやか」などに就いて」『立教大学日本文学』三五(昭  
 和五年二月)。
- 40 「そびやかなり」考―「夜の寝覚」を中心として」『聖徳学園短期大  
 学研究紀要』二〇(昭和六二年一月)。なお、志水は論考の資料と  
 しては省略しているが、他の文献にも若干の用例があることを指摘  
 している。ちなみに、『宇津保物語本文と索引』によれば、「うつほ  
 物語」において「そびゆ」「そびやく」の用例は見いだせないが、「そ  
 びやかなり」は四例みとめられる。
- 41 「中古文学における接尾辞「やか」「らか」―「源氏物語」玉鬘に用い  
 られた「そびやか・なごやか・さはらか・わららか」について―」  
 『国語研究』四二(昭和五七年三月)。
- 42 この二例以外のものには次の例がある。  
 ○薫  
 白き羅に唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引き

- やられて、御身はいとあらはにて背後のかぎりに着なしたまへるさまは、例のことなれど、いとらうたげに、白くそびやかに柳を削りて作りたらむやうなり。〔横笛〕四―三四九頁〕
- 玉鬘の中の君  
いま一ところは、薄紅梅に、御髪いろにて、柳の糸のやうにたをたをと思ゆ。いとそびやかにまめかしう澄みたるさまして、重りかに心深きけはひはまさりたまへれど、にほひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。〔竹河〕五―七五―七六頁〕
- 宇治の中の君  
いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて、未まで塵のまよひなく、艶々とこちたうつくしげなり。かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆か  
る。〔椎本〕五―二一七―二一八頁〕
- 志水富夫前掲40論文  
43 「明石一族との出会い―明石・澤標―」『国文学』三二―一三（昭和六二年一月）。
- 44 『源氏物語研究序説』東大出版会（昭和三四年）。
- 45 『源氏物語評釈』「松風」四―一―一五頁。
- 46 『源氏物語評釈』「松風」四―一―一五頁。
- 47 『河海抄』などの指摘をふまえ、石川徹はその類似性を発展的に跡づける（『明石上論』『平安時代物語文学論』笠間書院・昭和五四年）。
- 48 藤井貞和「物語を流れる水」『源氏物語論』岩波書店（平成一二年）。
- 49 鈴木日出男「光源氏の女君たち」『源氏物語とその影響 研究と資料』古代文学論叢（六）武蔵野書院（昭和五三年）。
- 50 「明石の上」『源氏物語講座』（四）有精堂（昭和四六年）。
- 51 三谷栄一「源氏物語とその基盤」『物語史の研究』有精堂（昭和四二年）。
- 52 「明石の君―その転換点・二条東院から六条院へ―」『源氏物語講座』（二）勉誠社（平成三年）。
- 53 鈴木日出男「源氏物語虚構論」東大出版会（平成一六年）。
- 54 竹内正彦「野分吹く明石の町―源氏物語における家司をめぐって―」
- 55 『群馬県立女子大学紀要』二三（平成一四年二月）。
- 56 阿部秋生前掲45論著。  
「たけき宿世―明石の君の人物造型―」『人物造型からみた『源氏物語』』至文堂（平成一〇年五月）。
- 57 鈴木日出男前掲49論文。  
新編全集「若菜下」四―一九三頁、頭注。